

留学生の異文化適応に関する研究 — 質問紙法と半構造化面接を用いて —

葛 文 綺

【問題と目的】

適応とは、主体としての個人がその欲求を満足させながら環境の諸条件のあるものに、調和的關係をもつ反応をするように、多少とも自分を変容させる過程である(北村, 1965)。

異文化適応を一つのプロセスとしてとらえた場合、Lysgaard (1955) の「U型カーブ」説と Gullahorn & Gullahorn (1963) の「W型カーブ」説がよく知られている。Lysgaard (1955) は調査対象を6ヶ月、6-18ヶ月、18ヶ月以上と、三つのグループに分けて、研究を行い、「U型カーブ」説を打ち立てた。すなわち、異文化での適応過程を、①異文化に移った当初の表面的適応→②適応の危機(被拒絶感と孤独を伴う困難)→③統合、というプロセスでとらえたのである。それに対して Gullahorn et al. は、何年かの異文化滞在の後帰国すると、復帰ショックを体験することから、Uをさらに延長した「W型カーブ」説を打ち立てた。

しかし、適応そのものの定義はかならずしも明白でなく、測定も困難な場合が多い。適応度を測定する代わりに、「不適応」の一つのあらわれであるカルチャー・ショックを指標として用いる場合が多い。

カルチャー・ショックの定義は、数多く試みられているが、簡単にいえば「異文化が衝突したときに受ける衝撃」である(石井・岡部・久米, 1987)。すなわち、異文化との接触において生ずる心理的反応の状態であり、その反応の仕方は個人によって異なり、軽度の当惑感からパニック感や精神的障害など、かなり強度の病的な症状を生じさせるものにもいたるまでいろいろとある。また、それは瞬間的なショック現象で終わるよりも、一定の時間にわたって生ずる現象である。よって、そこにはカルチャー・ショック固有のメカニズムが働き、またプロセスがある。

カルチャー・ショックの症状は、個人が異文化で生活するときのみあらわれるという点では、文化的現象であり、そのあらわれ方に個人差が大きい点で、個人的現象である。

近藤(1981)によると、文化的、社会的要因と個人的要因は緊張関係にあり、この両者が相互に影響し合う力動的作用の結果として、カルチャー・ショックが発生するという。この二つの要因を分けてみると、まず文化的、

社会的要因には価値観、通念、期待などのほかに、両文化間の政治的、経済的な地位や国際的立場、外国人に対してどれほど開かれているかといった点によっても、ショックの程度は変化する。個人的要因には学歴、年齢、性別、社会的地位、性格、コミュニケーション能力などが含まれる。原(1985)はこれ以外にも、個人のもっているストレス解消の手段やスキル、経済状態、準拠集団、同文化の人々によるサポートシステムなどをあげている。

日本の場合、留学生の適応問題については、さまざまな研究が行なわれてきたが、限られた大学を中心に研究が進められているに過ぎない。また、それらも実態調査で終わっている場合が多い。また、留学生総数の半分近く占める中国人留学生に限定すれば、そのほとんどが台湾からの留学生を対象とした研究である。歴史上では、台湾は中国の一部であったが、その文化背景、政治体制、経済力などを考慮すれば、中国の大陸と台湾は異なる2つの地域であるといえる。以上の点から、両者を区別して研究を進める必要がある。

本研究の目的は、留学生全体を対象に情緒、研究、対人関係および文化の4つの側面で受けた、カルチャー・ショックを測定することである。そして、カルチャー・ショックに影響する要因を検討し、さらに、留学生が日本留学に感じている、困難とその克服法を明らかにする。最後に、中国人留学生の特徴について考察することである。

【研究1】

<目的>

- 1) カルチャー・ショックを指標として、留学生の適応度を検討する。
- 2) 適応に関連する個人的要素を検証する。
- 3) 留学生活に感じる困難と、そのときどのように克服したかを調べる。
- 4) 適応過程と時間の経過との関係を検証する。

<方法>①被調査者：日本の国公立および私立大学に在籍する留学生166名(男性102名、女性64名)。②質問紙：質問紙はカルチャー・ショックを測定する尺度と日本留学に遭遇する困難に関する自由記述およびフェイス・シートによって構成されている。カルチャー・ショック尺度は研究(言語)に関する尺度、対人関係(社会)に関する

る尺度、精神衛生的尺度、文化に関する尺度の4つによって構成されている。全部で63項目を五段階尺度で評定させた。

＜結果と考察＞

まずカルチャー・ショックを指標として、留学生の適応度を質問紙法で測定した結果、精神的健康、対日感情、対人関係、言語的コミュニケーションという4つの因子が抽出された。

次に、この4つの因子に影響を与える個人的要因を検討した結果、精神的健康に関しては性別、対日感情に関しては専攻分野、出身地域、滞日期間、対人関係に関しては、出身地域、子どもの有無、言語的コミュニケーションに関しては、専攻分野、出身地域、子どもの有無、滞日期間がそれぞれ影響を与えていることが明らかとなった。

適応過程と時間の経過については、「U型カーブ」説とも、「W型カーブ」説とも異なる結果が見出された。まず、適応といっても、適応の側面によって、時間との関係が異なる。また、精神的な健康度においては、ほとんど時間との関連性がない。対人関係についても、来日直後はカルチャー・ショックは大きい、その後緩和され、半年になってからはずっと横ばい状態になる。対日感情に関しては、Uカーブ説とちょうど反対の曲線を描くことになる。言語的コミュニケーションにおいても、対日感情と似たような曲線が得られたが、来日直後の学生は、6ヶ月から1年までの学生よりも、日本人との交流ができていようである。

さらに、留学生が日本に留学するに至る過程の中において、遭遇する困難およびその克服法を見ると、経済と言語面において、特に困難を感じていることが明らかとなった。経済面での困難に関する解決法としては、ほとんどの学生がアルバイトのみに頼っている。そのため、生活と研究のジレンマに陥っている学生も少なくない。言語面での困難に関しては、英語を使ったり、筆談を用いたり、さまざまな努力がなされている。しかしながら全体的にみると、どちらの側面においても、困難にぶつかるときの解決法が十分になされていないのが現状である。

【研究2】

＜目的＞研究1の結果として、中国人留学生が他国からの留学生と比べて、精神的健康因子を除いて、日本の文化や習慣への受け入れ、対人関係、言語面などにおいて、よりカルチャー・ショックを受けていることがすでに見出されている。しかし、何故このような結果となったのか？その原因を探究することによって、中国人留学生が

抱えている問題および中国人留学生の特徴を見出すのが本研究の目的である。

＜方法＞①面接対象者：面接対象者は研究1の質問紙への回答者であった。まず、全回答者の中から中国人留学生を選び出し、面接の依頼をした。さらに、地理的に面接が困難と判断された中国人留学生、およびそれ以外の国と地域の被調査者全員に質問を書いてあったはがきを郵送した。はがきには筆者のE-mailのアドレスが書いており、できれば、E-mailで返事をするようにと依頼した。結果、面接をしたのは8名、電話でインタビューをしたのは3名、E-mailで返答が得られたのは9名だった。②面接内容：面接は以下の4つの質問に沿って行われた。

- 1) 来日経緯と目的、およびその目的の達成度
- 2) 来日前と来日後の日本と日本人に関するイメージの変化があったかどうか、およびその具体的な内容
- 3) 日本であった差別体験の有無および具体的な内容
- 4) 日本で困ったことおよび解決に至って援助してくれた人

＜結果と考察＞

中国の留学生を中心とした面接を行なった結果、①中国の留学生は他の国の留学生と比べ、来日に至る経緯と日本への留学目的が複雑な上、目的の達成度も低い、②対日感情に関しては、来日前は歴史などの問題でネガティブなものが多い。来日することによってポジティブな方向に変化するものの、ほぼ一貫した対日イメージを持っている、特に欧米の学生との違いが大きい。また③経済面で大きな困難を抱えているため、中国の留学生は他の国の学生よりもアルバイト先などでさまざまな差別体験を受けている、以上の3点が明らかになった。さらに、経済面だけでなく、言語面でも、中国の留学生が抱えている困難が大きい。その解決法は、自力以外に、同じ中国人同士に援助を求めるのが通常である。すなわち、日本人との十分なコミュニケーションが取られていない学生が多い。以上のように、多様な要因が複雑に関連することで、中国留学生の不適応をより深刻化してしまうことが、本研究より明らかとなった。

【総合的考察】

適応をどうとらえるかは、非常に難しい課題であり、研究者によって用いる適応尺度もまちまちである。そしてどの尺度も、適応の限られた側面しか測られていない。本研究では、留学生の適応度を測定するために、カルチャー・ショックを指標として用いたが、今後適応をどのようにとらえるかを改めて吟味するのが、このような研究の最大の課題となるだろう。